

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：82611

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03250

研究課題名(和文)「コグニティブライフシステム」の創出を目指して

研究課題名(英文)A Study of Creating "Cognitive Life System"

研究代表者

野田 隆政 (Takamasa, Noda)

国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・病院・医長

研究者番号：50446572

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円

研究成果の概要(和文)：衝動性の神経基盤に関する検討を行い、事象関連電位において課題提示から300ms以降に生じる脳活動(P300)が衝動性のコントロールに関連している可能性を確認した。安静時の脳活動を利用して従来のニューロフィードバック(Neurofeedback: NF)手法を改良し、課題中にフィードバックするタスク型NFを開発した。効果検証試験においてもタスク型NFは脳活動の良好な変化を認めた。また、タスク型NFトレーニングは従来法よりも短い期間で効果が発揮されることも分かった。また、NFと併用することで増強効果が期待できる知覚感度に関する自律神経系フィードバックを考案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではリアルワールドで衝動性を検知しニューロフィードバックによって衝動制御の支援をするシステムを各分野の専門家が連携して構築した。高度化したストレス社会において、暴力や犯罪だけでなく、自殺や依存などあらゆる領域に関係する衝動性は実生活における大きな課題である。言い換えれば、こころ豊かで健康的な生活、さらには幸福度を高めるためには衝動性のコントロールは必須である。本研究は、ニューロフィードバックにより自己学習を繰り返し、自力で脳活動を刷新するような「コグニティブライフシステム」へと発展させ、社会実装できる可能性に大きな意義がある。

研究成果の概要(英文)：We investigated the inhibition and impulsivity: Behavioral and neural bases.

It was confirmed that the peak brain activity (P300) showed in the event-related potential (ERP) was related to impulsive control. With conventional neurofeedback (NF), using an electroencephalogram (EEG), effects have not been consistent between studies and participants. In this study, we developed a task- combined NF performed during a situation that requires enhanced brain functioning, facilitated quicker acquisition of self-regulation of brain states and enhanced response inhibition. Our results suggest that task-combined NF could be used to learn how to increase brain activity for a shorter time, and to improve response inhibition more effectively.

研究分野：臨床精神医学、ニューロモデュレーション、精神生理学

キーワード：衝動性 衝動制御 脳波 事象関連電位 ニューロフィードバック

1. 研究開始当初の背景

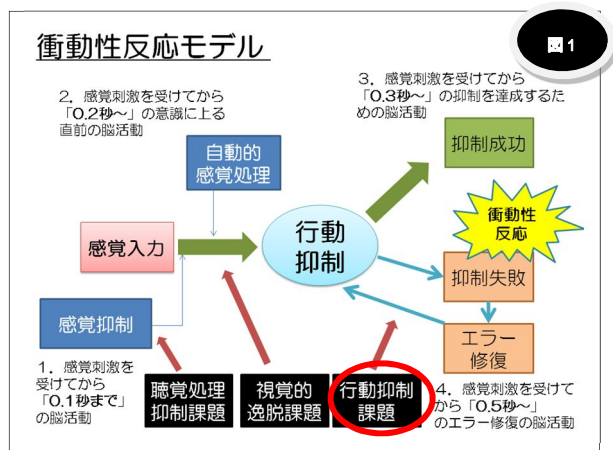
【背景】社会に不適応な行動を誘発する因子の一つとして、「衝動性」が注目されている。衝動性は、多要因から構成される複合的な概念であり、さまざまな精神疾患に関係する行動特性である。しばしば引用される定義によれば、“悲劇的な結末を熟慮せずに、早急に反応したり、無計画な行動をとるような行動特性とされる (Moeller et al., 2001)”。衝動性が及ぼす影響は、「切れやすさ」に限らず、適切な判断ができずに期待しない結果を招いたり、精神疾患においては自殺に関連するなど多岐にわたる。衝動性のコントロールはストレスが増大している現代社会において、こころの健康における重要課題である。衝動性のコントロールには「抑制機能」が密接に関連しており (Barri & Robins, 2013) 申請者らは、健常成人群に対して抑制機能を中心に研究を進めてきた (Soshi, Noda, Ando, Nakazawa, Tsumura, & Okada, 2015a,b,c など)。申請者らが用いてきた実験パラダイムは、感覚入力から、自動的感覚処理、反応抑制、そしてエラー修復までのフィードバック過程を網羅している (図 1)。<外部感覚入力>に関しては、前注意的な感覚抑制処理に着目し聴覚課題を用いた。感覚抑制は認知機能が背景情報から干渉を受けずに機能するためには重要である (Lijffijt et al., 2012)。そこで、情動価が高いノイズを用いることで、衝動性に敏感な検査方法を開発した (Soshi et al., 2015b)。<自動的感覚処理>に関しては、高頻度刺激と低頻度刺激をランダムに呈示するミスマッチパラダイムが用いられる (Näätänen et al., 1978)。顔刺激を用いたところ、衝動性が高いと前頭前野からのトップダウン処理が弱まり、感覚処理が低下することを報告した (Soshi et al., 2015c)。上記の感覚処理に関する結果は、衝動性は高次抑制機能が働く前の自動的処理にも影響を与えることを示している。<高次抑制機能>に関しては Go/No-go 課題などが用いられ、衝動性が高いと後期抑制活動が低下し (Harmon-Johnes et al., 1997) エラー後の回復処理が働きにくいことが知られている

(de Bruijn et al., 2006) Go/No-go 課題を改良し、時間的圧迫条件下 (刺激が消える前に反応する) で調べたところ (Soshi et al., 2015a) 健常群においてもエラー回復が遅れ、衝動性スコアが高いほど脳活動が低下することが分かった。また、抑制成功時、エラー時、エラー回復時の脳活動を用いて、機械学習の手法により、衝動性高低群の分類に有効な脳活動を調べたところ、約 80% の精度で衝動性高低群を分類できた。

2. 研究の目的

本研究はこれまでの研究成果に基づき、衝動性の神経基盤の研究を進めると同時に、抑制機能に関わる脳活動をニューロフィードバックし、セルフモニタリングによる抑制機能促進方法を確立する。この目的のために、研究グループを 4 つ設ける。

「臨床群研究グループ」は精神疾患患者群における衝動性の神経基盤を特定する。臨床群では抑制機能を含めた行動制御機能の異常が報告されている。物質依存症の患者群ではエラー回復が働きにくく (Lawrence et al., 2009) 右背側前頭前野の機能異常が報告されている (Li et al., 2009)。特定の臨床群では、前方帯状回などの灰白質の容積が減少しているという報告もある (Lee et al., 2013)。衝動性は、精神疾患の病状や認知機能障害と関連しており、治療反応性という観点から神経基盤を解明する必要がある。治療前後で脳波 (EEG) や近赤外分光法 (NIRS) を用いて、ニューロフィードバックに役立つ抑制関連脳活動を同定する。



「**健常群研究グループ**」は性格特性と衝動性の関係を調べる。先行研究では、自己中心性が高い健常群は BIS-11 などの衝動性スコアも高かったが、行動課題では無計画性に関わる衝動性選択と相関が高かった (Morgan et al., 2011)。社会的不適応行為でも計画性が高い場合は、抑制機能を含めた実行系機能に異常がないという報告もあり (Lappierre et al., 1995; Mitchell et al., 2002)。性格特性と衝動性の関係はトレードオフの関係にある可能性がある。性格特性を調べるための衝動性選択に関わる報酬課題や、成績低下が報告されている反応スイッチ課題などを用いて、抑制機能との関係を行動ならびに脳活動レベルで特定する。

「**親子研究グループ**」は、衝動性の遺伝性に注目し、両親の持つ衝動性がどのように乳児の行動特性と関係するかを調べ、ニューロフィードバックにより変化する可能性がある因子を見つけ出す。衝動性の特性として新奇刺激になれやすいことが知られている (Dickman et al., 2000)。乳児の注意特性には、馴化 脱馴化パラダイムが用いられる (Fantz, 1963; Kavšek & Bornstein, 2010)。視線追跡装置を用いて、乳児が馴れるまでの時間や脱馴化期における注意回復と再馴化といった注意特性を調べる。両親に関しては、抑制課題中の脳活動や衝動性スコアを計測し、乳児の注意特性との相関関係を調べる。

「**ニューロフィードバックグループ**」は、衝動性コントロールのためのトレーニング方法を確立する。脳活動は簡便に利用できる EEG と NIRS を用いる。フィードバックに用いる脳活動を特定する必要がある。抑制課題を改良して EEG フィードバックが安定して実現できる課題設定を見つけ、衝動性特性を敏感に検出する方法を構築し、ニューロフィードバックの有効性を確認する。EEG フィードバックと異なり、NIRS のニューロフィードバックは発展途上段階にあり、オンライン信号処理からフィードバックまでのプログラムを作成、熟成する必要がある。したがって、Simlink などの汎用演算ソフトを用いてプログラムを開発し、本プロジェクトを基礎にして、4 年後の応用に向けプロトタイプを作成する。

3. 研究の方法

衝動性の神経基盤を検討し、衝動性制御のためのニューロフィードバック手法を確立するために 4 年間の研究期間を設定し、健常被験者および精神科患者を対象とした。患者群においては衝動性に関わる神経基盤を EEG や NIRS を用いて調査した。大きな目的は以下の 3 つである。なお、親子群グループは、乳児の注意傾向への影響を視線計測や EEG を用いて追跡調査する予定であったが、被験者確保が困難であるためニューロフィードバックへ焦点を絞ることにした。

1. 衝動性の神経基盤に関する探索的調査
2. ニューロフィードバックシステムの構築
3. 衝動性と知覚との関係

1. 衝動性神経基盤に関しては、探索的に行動指標、fMRI や EEG、NIRS による脳機能との関連を探索的に計測、検討した。fMRI では健常被験者を対象に情動調節課題を、EEG ではうつ病患者や健常被験者を対象に Go/No-Go 課題や言語処理課題、行動抑制課題、リズム課題などを、NIRS では統合失調症患者を対象に言語流暢性課題を用いた。

2. ニューロフィードバックの構築に関しては、健常被験者を対象として脳波から Sensorimotor rhythm (SMR) 成分を計算し、モニター画面にフィードバックするシステムを構築した。

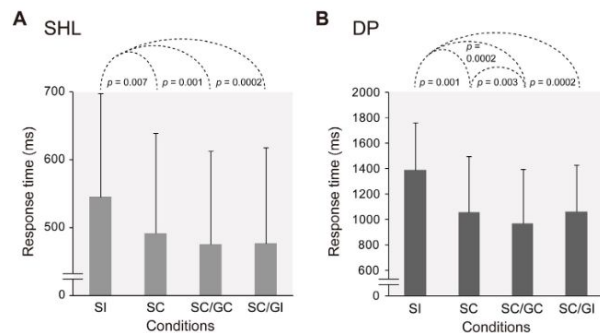
3. 衝動性と知覚との関係に関しては、衝動性のコントロールのためには前頭葉機能を中心に強化するニューロフィードバックのみならず、自律神経系を含めた身体反応を強化するニューロフィードバックも必要になることから、入力刺激への感度が衝動性に関係するという仮説に則り、視覚および聴覚刺激に対する感度 (閾値) を測定した。ヒトの衝動性に関連する知覚-反応系の機能的特徴を明らかにするために、時間知覚・空間知覚、非意識性視覚情報に対する選択反

応、ヒトの動きの判別、静止立位姿勢制御における視覚の影響を取り上げ、そのメカニズムの解明を目指した。

4. 研究成果

衝動性の神経基盤に関する探索的調査

(1) 意味処理: 先行研究では衝動性と言語処理において読解力などの言語処理能力が高いほど、衝動性の抑制機能が効率的に働き、行動表出を抑えられることが示唆されてきた。本研究では意味判断を意識して行われるかという点に注目し、脳活動への反映を調査した。意識が直接意味処理に向けられると、言語処理が促進され、脳活動高価(意味処理の N400 の事象関連電位成分)が持続して出現した (Soshi et al., 2016a)。



(2) 注意機能: 意味処理と注意の研究では、文を用いた言語予測をテーマに、言語処理にどのような意識的な実行系機能が関わるかを調査した。言語処理は意識せずともデフォルトの言語処理パターンが機能し、十分な言語情報がなくても先読み処理が働くことが示唆された。意識や予測方略が強く働く言語処理を促進することが、脳活動を効果的に変化させ、認知や行動特性にポジティブな影響をあたえることが想定できた (Soshi et al., 2016b)。

(3) 性格特性: 気分障害患者を対象に抑圧タイプと回避タイプに分類し、Go/No-go 課題を行ったところ、300ms 以降の脳活動において臨床的抑圧型では陰性電位、臨床的回避型では陽性電位を示した。両者の違いは日常的に抑圧していることで課題に対する脳活動自体が低いタイプと、回避型は状況に応じて抑制機能を用いて回避方略を探ることに違いがあると考えられた。

(4) 情動制御: fMRI を用いて健常被験者を対象に予備的に検討した。日常的に情動をコントロールしている方が情動制御課題における脳活動が低く、日常的な学習による情動制御の馴化が示唆された。

(5) 衝動性の高低: 健常被験者と気分障害患者において、行動抑制課題、言語課題、リズム課題などを用いて、衝動性、ならびに反応抑制機能に関わる、脳波を用いた神経生理学的実験を行った。機械学習の手法を用いて、衝動性高低群の分類分析を行ったところ、反応抑制エラー後のエラー回復過程に関わる早期電位が分類に有効に働き、エラー後のフィードバック処理が有効であることが分かった。さらに、言語とリズム嗜好性と抑制活動のマルチ課題の結果から、早いリズムへの嗜好性が高い衝動性と関連していることが分かった。また、気分障害患者群では、行動抑制に関わる後期の陰性もしくは陽性脳活動が臨床における心理学的分類と一致している所見が示唆された。

(6) うつ病と自殺: うつ病における認知機能障害は自殺関連行動や希死念慮に影響することを

確認し、ニューロフィードバックにおける認知機能へのアプローチの重要性が示唆された (Pu et al., 2017)。

	Suicidal ideation HAM-D item 3	Depressive symptoms HAM-D
BACS		
Verbal memory	-0.09	-0.11
Working memory	-0.08	-0.11
Motor speed	-0.16*	-0.16*
Verbal fluency	-0.06	-0.14
Attention and speed of information processing	-0.09	-0.11
Executive function	-0.19***	-0.17**
Composite score	-0.16*	-0.20***

Table 3. Correlation coefficients between the cognitive ability and suicidal ideation, and depressive symptoms in patients with MDD. Note: MDD, Major Depressive Disorder; HAM-D, 17-item Hamilton Depression Rating Scale; BACS, Brief Assessment of Cognition in Schizophrenia. *p < 0.05. **p < 0.01. ***p < 0.005.

(7) 統合失調症とワーキングメモリ

統合失調症において前頭部の NIRS 信号が認知機能の一つであるワーキングメモリの指標となることが示唆され、NIRS によるニューロフィードバックの可能性を示した (Noda et al., 2017)。

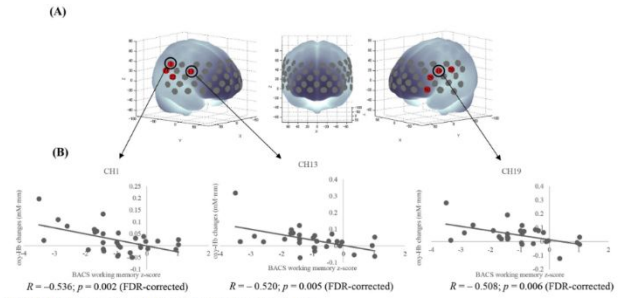


Fig. 8. Coronal distributions of the significant correlations between the mean oxy-Hb changes and cognitive function. (A) The red channels indicate significant correlations between oxy-Hb changes during the post-task period and BACS working memory z-score (FDR-corrected $p < 0.05$). (B) Scatter graph showing the relationship between BACS working memory z-score and oxy-Hb changes during the post-task period in representative channels (CH1, CH13, and CH19).

ニューロフィードバックシステムの構築

(1) ニューロフィードバックの対象：前述の通り性格特性などが多分に衝動制御のコントロールに影響することがわかったため、ニューロフィードバックを検討する上で、標準的な心理特性を示す被験者をターゲットとしたシステムを構築する計画へ変更した。

(2) タスク型ニューロフィードバック：従来のニューロフィードバックでは脳状態の自己調整の習得に時間がかかり、効果が研究者間で一致しないという課題があった。そこで、従来法では安静時にニューロフィードバックを行っていることに注目し、課題中にフィードバックするタスク型ニューロフィードバックを開発した。

(3) タスク型ニューロフィードバックの効果検証：反応抑制機能を高めるためのニューロフィードバックを用いたトレーニング実験を行い、この方法では、脳活動量を明確にフィードバックするよう工夫を重ねたことで、短期間で脳の自己調整を習得し反応抑制機能を高めることが期待できる。健常被験者を対象として、Go/No-go 課題を用いて反応抑制タスクとニューロフィードバックを交互に 3 日間行い効果検証した。生理指標は反応抑制に関わるとされる脳波 (Sensorimotor rhythm: SMR) を用いた。結果、5 名中 4 名の被験者がタスク型ニューロフィードバックトレーニングにより SMR 活動の上昇を認めた。また、各トレーニング日におけるニューロフィードバックトレーニング前半・後半の SMR 活動の変化量はニューロフィードバックトレーニング前後の反応抑制タスクの誤答率の変化に負の相関を認め、タスク型ニューロフィードバックトレーニングによって反応抑制機能が高まる可能性が示された。また、タスク型ニューロフィードバックトレーニングは従来法よりも短い期間で効果が発揮されることも分かった。

衝動性と知覚との関係

衝動性のコントロールのためには前頭葉機能を中心に強化するニューロフィードバックのみならず、自律神経系を含めた身体反応を強化するニューロフィードバックも必要になることが一連の研究から分かった。衝動性の高さは入力刺激への感度が高いという仮説に則り、視覚および聴覚刺激に対する感度 (閾値) を測定した。ヒトの衝動性に関連する知覚-反応系の機能的特徴を明らかにするために、時間知覚・空間知覚、非意識性視覚情報に対する選択反応、ヒトの動きの判別、静止立位姿勢制御における視覚の影響を取り上げ、そのメカニズムの解明を目指した。また、心理物理学的方法を用いて聴覚刺激に対する感度 (閾値) を測定するための実験システムを構築し、健常者に対して検証実験を実施した。衝動性へのニューロフィードバックを反応抑制機能に加えて、自律神経系を含めた身体反応を強化することを目的として、衝動性と知覚感度の関係に、前額部皮膚温が関与するという仮説を立て、効果を実証的に検討するために、前額部冷却装置を作製した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計46件（うち査読付論文 21件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 18件）

1. 著者名 Nakano Shun, Ishihara Masami	4. 巻 78
2. 論文標題 Working memory can compare two visual items without accessing visual consciousness	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Consciousness and Cognition	6. 最初と最後の頁 885 ~ 893
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi:10.1016/j.concog.2019.102859	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 安藤久美子	4. 巻 28
2. 論文標題 ICD-11：パーソナリティ障害と秩序破壊的または非社会的行動症群 精神病理学的視点の再考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本社会精神医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 147 ~ 158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 安藤久美子	4. 巻 34(増刊号)
2. 論文標題 ミュンヒハウゼン症候群 / 代理ミュンヒハウゼン症候群	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 331 ~ 333
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Mohring, W., Ishihara, M., Curiger, J., & Frick, A	4. 巻 83(5)
2. 論文標題 Spatial-numerical associations in first-graders: Evidence from a manual-pointing task.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Psychological Research	6. 最初と最後の頁 885 ~ 893
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi:10.1007/s00426-017-0904-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Iwanaga Toshihide, Shibuya Takayuki, Yokota Hiroyuki, Ichihara Shigeru, Yamashita Toshiyuki, Shimokawa Akio, Ishihara Masami	4. 巻 42
2. 論文標題 Color Appearance Evaluation of Different Light Sources by Principal Component Analysis	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Science and Technology in Lighting	6. 最初と最後の頁 5 ~ 13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2150/jstl.IEIJ180000630	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 杉卓洋、石原正規	4. 巻 46
2. 論文標題 ボルダリングにおける視覚的ルート呈示法と動作方略の影響: クライミング前に行うルートのオブザベーションと記憶の関係について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 スポーツ心理学研究	6. 最初と最後の頁 97 ~ 113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi: 10.4146/jjspopsy.2019-1806	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安藤久美子	4. 巻 21
2. 論文標題 少年司法における医療へのダイバージョン	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 家庭の法と裁判	6. 最初と最後の頁 11 ~ 21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tsuchimine Shoko, Hattori Kotaro, Ota Miho, Hidese Shinsuke, Teraishi Toshiya, Sasayama Daimei, Hori Hiroaki, Noda Takamasa, Yoshida Sumiko, Yoshida Fuyuko, Kunugi Hiroshi	4. 巻 15
2. 論文標題 Reduced plasma orexin-A levels in patients with bipolar disorder.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Neuropsychiatric Disease and Treatment	6. 最初と最後の頁 2221 ~ 2230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.2147/NDT.S209023	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野田隆政	4. 巻 34(6)
2. 論文標題 【ニューロモデレーション治療の可能性】 ECTの現在地	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神科	6. 最初と最後の頁 557 ~ 561
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Gotoh Leo, Yamada Misa, Hattori Kotaro, Sasayama Daimei, Noda Takamasa, Yoshida Sumiko, Kunugi Hiroshi, Yamada Mitsuhiro	4. 巻 5(5)
2. 論文標題 Lysophosphatidic acid levels in cerebrospinal fluid and plasma samples in patients with major depressive disorder	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Heliyon	6. 最初と最後の頁 e01699 ~ e01699
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi:10.1016/j.heliyon.2019.e01699	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ota Miho, Noda Takamasa, Sato Noriko, Hidese Shinsuke, Teraishi Toshiya, Setoyama Shiori, Matsuda Hiroshi, Kunugi Hiroshi	4. 巻 251
2. 論文標題 The use of diffusional kurtosis imaging and neurite orientation dispersion and density imaging of the brain in bipolar disorder	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Affective Disorders	6. 最初と最後の頁 231 ~ 234
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) DOI:10.1016/j.jad.2019.03.068	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 杉卓洋, ニツ アンダ-マリア, 石原正規	4. 巻 119(39)
2. 論文標題 動作分析のためのオープンソースKinoveaの利用について: ダートフィッシュ・ソフトウェアとの比較	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 電子情報通信学会技術研究報告	6. 最初と最後の頁 215 ~ 219
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Gotoh Leo, Yamada Misa, Hattori Kotaro, Sasayama Daimei, Noda Takamasa, Yoshida Sumiko, Kunugi Hiroshi, Yamada Mitsuhiro	4. 巻 273
2. 論文標題 Levels of lysophosphatidic acid in cerebrospinal fluid and plasma of patients with schizophrenia	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Psychiatry Research	6. 最初と最後の頁 331 ~ 335
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.psychres.2019.01.052	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nakazawa Kanako, Noda Takamasa, Ichikura Kanako, Okamoto Tomoko, Takahashi Yuji, Yamamura Takashi, Nakagome Kazuyuki	4. 巻 25
2. 論文標題 Resilience and depression/anxiety symptoms in multiple sclerosis and neuromyelitis optica spectrum disorder	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Multiple Sclerosis and Related Disorders	6. 最初と最後の頁 309 ~ 315
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.msard.2018.08.023	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Narita Zui, Noda Takamasa, Setoyama Shiori, Sueyoshi Kazuki, Inagawa Takuma, Sumiyoshi Tomiki	4. 巻 103
2. 論文標題 The effect of transcranial direct current stimulation on psychotic symptoms of schizophrenia is associated with oxy-hemoglobin concentrations in the brain as measured by near-infrared spectroscopy: A pilot study	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Psychiatric Research	6. 最初と最後の頁 5 ~ 9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jpsychires.2018.05.004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Pu Shenghong, Noda Takamasa, Setoyama Shiori, Nakagome Kazuyuki	4. 巻 48 (16)
2. 論文標題 Empirical evidence for discrete neurocognitive subgroups in patients with non-psychotic major depressive disorder: clinical implications	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Psychological Medicine	6. 最初と最後の頁 2717 ~ 2729
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/S003329171800034X	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 秋山康介, 山本将兵, 杉下友美子, 金子凌太, 岡本奈央子, 小金沢征也, 藤田祥央, 松野良介, 外山大輔, 長谷川由美, 瀬戸山志緒里, 池澤聡, 野田隆政, 磯山恵一	4. 巻 59 (9)
2. 論文標題 小児がん経験者の認知機能に関する検討 (Neurocognitive evaluation of childhood cancer survivors)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 臨床血液	6. 最初と最後の頁 1606
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野田隆政, 本橋伸高	4. 巻 21 (7)
2. 論文標題 うつ病に対するECTの課題と現状	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 臨床精神薬理	6. 最初と最後の頁 931 ~ 939
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本壘, 野田隆政	4. 巻 60 (6)
2. 論文標題 糖尿病領域との協働	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 精神医学	6. 最初と最後の頁 639 ~ 646
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田幸之	4. 巻 55 (3)
2. 論文標題 刑事司法において心と脳の異常の意味を正しく取り扱う	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 罪と罰	6. 最初と最後の頁 33 ~ 43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安藤久美子	4. 巻 84(6)
2. 論文標題 我が国における性犯罪者治療の今 - 性犯罪者の治療介入アプローチ：SPIRITSの開発と実践 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 犯罪学雑誌	6. 最初と最後の頁 160～170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安藤久美子	4. 巻 17(1)春
2. 論文標題 性犯罪の実態と加害者治療の今 - 加害者介入アプローチ - SPIRITSの紹介 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 性の健康	6. 最初と最後の頁 30～35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安藤久美子	4. 巻 199
2. 論文標題 発達障害・知的障害の治療 - 性犯罪プログラムの実践を踏まえて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 こころの科学	6. 最初と最後の頁 83～89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安藤久美子	4. 巻 17(2)夏
2. 論文標題 思春期における性に関する問題 - 性的被害の実態を知る -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 性の健康	6. 最初と最後の頁 26～29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安藤久美子	4. 巻 44(3)
2. 論文標題 暴力のリスク・アセスメント	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日精診	6. 最初と最後の頁 15~28
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安藤久美子	4. 巻 33(8)
2. 論文標題 司法的観点を活かした発達障害臨床	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 943~947
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中澤佳奈子、安藤久美子	4. 巻 33(8)
2. 論文標題 性犯罪加害者・被害者のアセスメントと治療アプローチ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 965~969
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安藤久美子	4. 巻 17(3)
2. 論文標題 思春期における性に関する問題-性的被害の実態とその治療-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 性の健康	6. 最初と最後の頁 24~28
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ota Miho, Noda Takamasa, Sato Noriko, Hidese Shinsuke, Teraishi Toshiya, Setoyama Shiori, Sone Daichi, Matsuda Hiroshi, Kunugi Hiroshi	4. 巻 98
2. 論文標題 The use of diffusional kurtosis imaging and neurite orientation dispersion and density imaging of the brain in major depressive disorder	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Psychiatric Research	6. 最初と最後の頁 22 ~ 29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jpsychires.2017.12.011	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ogawa Shintaro, Koga Norie, Hattori Kotaro, Matsuo Junko, Ota Miho, Horii Hiroaki, Sasayama Daimei, Teraishi Toshiya, Ishida Ikki, Yoshida Fuyuko, Yoshida Sumiko, Noda Takamasa, Higuchi Teruhiko, Kunugi Hiroshi	4. 巻 96
2. 論文標題 Plasma amino acid profile in major depressive disorder: Analyses in two independent case-control sample sets	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Psychiatric Research	6. 最初と最後の頁 23 ~ 32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jpsychires.2017.09.014	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kito Shinsuke, Matsuda Yuki, Sewaki Yurie, Sekiya Junpei, Fujii Takeshi, Noda Takamasa, Ikezawa Satoru, Takano Harumasa, Nakazawa Kanako, Nomura Mami, Setoyama Shiori, Nakagome Kazuyuki	4. 巻 33 (4)
2. 論文標題 A 6-Month Follow-up Case Study of Low-Frequency Right Prefrontal Repetitive Transcranial Magnetic Stimulation in Treatment-Resistant Bipolar Depression	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The Journal of ECT	6. 最初と最後の頁 e43 ~ e44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1097/YCT.0000000000000459	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Noda Takamasa, Nakagome Kazuyuki, Setoyama Shiori, Matsushima Eisuke	4. 巻 95
2. 論文標題 Working memory and prefrontal/temporal hemodynamic responses during post-task period in patients with schizophrenia: A multi-channel near-infrared spectroscopy study	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Psychiatric Research	6. 最初と最後の頁 288 ~ 298
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jpsychires.2017.09.001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Pu Shenghong, Setoyama Shiori, Noda Takamasa	4. 巻 7
2. 論文標題 Association between cognitive deficits and suicidal ideation in patients with major depressive disorder	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Scientific Reports	6. 最初と最後の頁 11637
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1038/s41598-017-12142-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hidese Shinsuke, Ota Miho, Matsuo Junko, Ishida Ikki, Hiraishi Moeko, Yoshida Sumiko, Noda Takamasa, Sato Noriko, Teraishi Toshiya, Hattori Kotaro, Kunugi Hiroshi	4. 巻 225
2. 論文標題 Association of obesity with cognitive function and brain structure in patients with major depressive disorder	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Affective Disorders	6. 最初と最後の頁 188 ~ 194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jad.2017.08.028	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Moriguchi Yoshiya, Noda Takamasa, Nakayashiki Kosei, Takata Yohei, Setoyama Shiori, Kawasaki Shingo, Kunisato Yoshihiko, Mishima Kazuo, Nakagome Kazuyuki, Hanakawa Takashi	4. 巻 38 (10)
2. 論文標題 Validation of brain-derived signals in near-infrared spectroscopy through multivoxel analysis of concurrent functional magnetic resonance imaging	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Human Brain Mapping	6. 最初と最後の頁 5274 ~ 5291
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/hbm.23734	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野田隆政	4. 巻 75 (10)
2. 論文標題 うつ病の検査・診断	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本臨牀	6. 最初と最後の頁 1508 ~ 1512
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田深秀, 野田隆政, 佐藤典子, 服部功太郎, 堀弘明, 篠山大明, 寺石俊也, 長島杏那, 大部聡子, 樋口輝彦, 功刀浩	4. 巻 119(5)
2. 論文標題 メランコリー型の特徴を伴う大うつ病性障害と非定型の特徴を伴う大うつ病性障害の白質障害の違い	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 精神神経学雑誌	6. 最初と最後の頁 295 ~ 302
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野田隆政	4. 巻 38(2)
2. 論文標題 不安症候群/不安障害群-抗不安薬による副作用	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 新領域別症候群シリーズNo.38 精神医学症候群(第2版)	6. 最初と最後の頁 77 ~ 81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安藤久美子	4. 巻 32(8)
2. 論文標題 作為症/虚偽性障害	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 1027 ~ 1031
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安藤久美子, 河野稔明, 曾雌崇弘, 岡田幸之	4. 巻 63
2. 論文標題 研究成果を社会実装する 心神喪失者等医療観察法施行10年	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 精神保健研究	6. 最初と最後の頁 17 ~ 24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ando, K., Soshi, T., Nakazawa, K., Noda, T., & Okada, T.	4. 巻 7(144)
2. 論文標題 Risk factors for problematic behaviors among forensic outpatients under the Medical Treatment and Supervision Act in Japan.	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychiatry	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsy.2016.00144	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安藤久美子, 曾雌崇弘, 中澤佳奈子, 河野稔明, 菊池安希子, 米田恵子, 藤井千代, 岡田幸之	4. 巻 62
2. 論文標題 触法精神障害者の社会復帰の現状と課題 - 事件をおこしてしまった精神障害者たちにとっての社会復帰 -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 精神保健研究	6. 最初と最後の頁 97-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安藤久美子	4. 巻 34(1)
2. 論文標題 司法精神医学と発達障害 - 精神鑑定で出会う少年たち -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 思春期学	6. 最初と最後の頁 32-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Soshi T, Nakajima H, Hagiwara H	4. 巻 2(10)
2. 論文標題 Grammatical markers switch roles and elicit different electrophysiological responses under shallow and deep semantic requirements.	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Heliyon	6. 最初と最後の頁 e00180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.heliyon.2016.e00180	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安藤久美子	4. 巻 30(1)
2. 論文標題 刑事鑑定の国際比較	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 精神科	6. 最初と最後の頁 28-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Soshi T, Hagiwara H.	4. 巻 22
2. 論文標題 Non-economical verbal information processing driven by a "look-ahead" strategy under poor availability of structural information.	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Interdisciplinary Information Sciences	6. 最初と最後の頁 123-141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) http://doi.org/10.4036/iis.2016.R.04	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計50件(うち招待講演 0件/うち国際学会 10件)

1. 発表者名 山下利之, ダムディン ドゥルグーン, 工藤芳彰, 栗山裕, 笠松慶子, 石原正規
2. 発表標題 モンゴル企業のロゴイメージに関する研究
3. 学会等名 日本知能情報ファジィ学会, 関東支部, 第46回ファジィ・ワークショップ, 講演論文集掲載発表, 首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス(東京)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ダムディン ドゥルグーン, 山下利之, 石原正規
2. 発表標題 モンゴルと日本の大学生の進学動機および職業選択に向けての目標意識調査比較
3. 学会等名 日本知能情報ファジィ学会, 関東支部, 第46回ファジィ・ワークショップ, 講演論文集掲載発表, 首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス(東京)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡辺かつみ, 野崎真奈美, 石原正規, 高尾秀伸
2. 発表標題 人工呼吸器のウィーニングにおける新人看護師の状況認識
3. 学会等名 第28回日本人間工学会システム大会, 首都大学東京 (東京・オンライン開催)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 杉卓洋, 石原正規
2. 発表標題 クライミングホールドの視覚-触覚情報が運動準備に与える影響について
3. 学会等名 第28回日本人間工学会システム大会, 首都大学東京 (東京・オンライン開催)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ダムディン ドゥルグーン, 山下利之, 笠松慶子, 石原正規
2. 発表標題 モンゴル企業のロゴイメーシの比較研究
3. 学会等名 第28回日本人間工学会システム大会, 首都大学東京 (東京・オンライン開催)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hitsuyu R., Ueda K., Nakao M., & Noda T
2. 発表標題 Development of task-combined neurofeedback system to enhance response inhibition.
3. 学会等名 Real-time functional imaging and neurofeedback conference. Maastricht, Netherlands (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 深野紗代, 塚原さち子, 熊田知佳, 安藤久美子, 小野和哉
2. 発表標題 ペアレント・トレーニング終了後のスキルの使用を維持・継続する要因の検討 ペアレント・トレーニング終了後の実施アンケートから
3. 学会等名 第60回日本児童青年精神医学会総会, ポスター発表, 沖縄コンベンションセンター (沖縄)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塚原さち子, 深野紗代, 熊田知佳, 安藤久美子, 小野和哉
2. 発表標題 大学病院児童思春期外来におけるペアレント・トレーニングの取り組み - 母親視点からの効果謙称に基づくトレーニングの意義と課題 -
3. 学会等名 第60回日本児童青年精神医学会総会, ポスター発表, 沖縄コンベンションセンター (沖縄)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野田隆政, 鬼頭伸輔
2. 発表標題 rTMSの臨床応用-双極性障害抑うつエピソードへの反復経頭蓋磁気刺激療法 (rTMS)
3. 学会等名 第49回日本臨床神経生理学会学術大会, シンポジウム, コラッセふくしま (福島)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野田隆政
2. 発表標題 NIRSの活用と問題点-日常臨床におけるNIRSの活用
3. 学会等名 第49回日本臨床神経生理学会学術大会, シンポジウム, ザ・セレクトン福島 (福島)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 今中國泰, 杉卓洋, 石原正規
2. 発表標題 テコンドーキック予測判断における表象的慣性 (近い将来が見える視覚機能representational momentum, RM) の貢献
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第46回大会, 筑波大学 (茨城)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤壮平, 石原正規
2. 発表標題 輪郭情報が動きの位置判断に及ぼす影響について
3. 学会等名 日本アニメーション学会, 「秋の研究集会@新千歳2019」, 新千歳空港国際アニメーション映画祭2019会場 (北海道)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉卓洋, 石原正規
2. 発表標題 クライミングオブザベーションにおける身体動作の影響について
3. 学会等名 第23回神奈川体育学会大会, 神奈川大学横浜キャンパス (神奈川)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sarusawa, T. & Ishihara, M.
2. 発表標題 The effect of flicker frequency and velocity on time dilation.
3. 学会等名 Timing Research Forum2019, Queretaro, (Mexico) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Horiuchi,K., Imanaka,K.,& Ishihara,M.
2. 発表標題 The functional role of vection for quiet standing:A study using expanding and contracting visual stimuli.
3. 学会等名 21st Conference of the European Society for Cognitive Psychology,Santa Cruz de Tenerife,(Spain) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉卓洋, 石原正規
2. 発表標題 運動イメージ中の身体の動きが探索行動に与える影響について：フリークライミング競技のオブザベーションに着目して
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会, (公募シンポジウム80「身体運動と知覚・認知のインタラクション」), 立命館大学茨木キャンパス (大阪)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Imanaka,K.,Sugi,T., Ishihara,M.,& Nakamoto,H.
2. 発表標題 Anticipatory vision as a function of seeing the near future in Taekwondo:Evidence obtained from the representational momentum(RM) paradigm.
3. 学会等名 Asia-Singapore Conference on Sport Science(ACSS),Grand Copthorne Waterfront, (Singapore) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sugi,T.& Ishihara,M
2. 発表標題 Does mimicking actual movement during climbing observation change the subsequent climbing movements?
3. 学会等名 15th European Congress of Sport & Exercise Psychology(FEPSAC),Munster (Germany) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安藤久美子
2. 発表標題 「精神鑑定への誘い」
3. 学会等名 第116回東京精神医学会, ステーションコンファレンス東京(東京)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ishihara,M.,Sugi,T.,Sato,S.,& Lestrel,P.E
2. 発表標題 The evaluation of the Bouba/Kiki figures:An approach to analyze these shapes using a method of Likert scale and Fourier descriptors.
3. 学会等名 The 6th International Symposium on Biological Shape Analysis,Boulogne-sur-Mer (France) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡田幸之
2. 発表標題 電腦空間における犯罪とダイバーシティ
3. 学会等名 第115回日本精神神経学会学術総会, 朱鷺メッセ(新潟)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安藤久美子
2. 発表標題 医療と司法から見たダイバーシティ「個性とダイバーシティ - ジェンダーと発達障害の視点から」
3. 学会等名 第115回日本精神神経学会学術総会, シンポジウム68,朱鷺メッセ(新潟)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安藤久美子, 加茂登志子, 三原伊保子ら
2. 発表標題 精神科領域におけるダイバーシティとワークライフマネジメントの現状: 2017年調査 第2報
3. 学会等名 第115回日本精神神経学会学術総会, 朱鷺メッセ (新潟)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鮫島達夫, 水野雅文, 野田隆政, 中村元昭, 金野倫子, 鬼頭伸輔, 一瀬邦弘, 篠崎和弘, 本橋伸高, 神出誠一郎, 澤温, 和田健, 橋本学, 渡辺雅子, 三浦智史, 福田正人, 三村將
2. 発表標題 ECT・rTMS等検討委員会の活動について
3. 学会等名 第115回日本精神神経学会学術総会, ポスター発表, 朱鷺メッセ (新潟)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安田和幸, 野田隆政
2. 発表標題 電気けいれん療法 (ECT) の適応
3. 学会等名 第115回日本精神神経学会学術総会, シンポジウム, 朱鷺メッセ (新潟)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鮫島達夫, 野田隆政, 金野倫子, 神出誠一郎, 一瀬邦弘, 橋本学, 本橋伸高, 澤温, 和田健, 水野雅文
2. 発表標題 我が国での電気けいれん療法 (ECT) の現況 日本精神神経学会ECT・rTMS委員会の全国調査から
3. 学会等名 第115回日本精神神経学会学術総会, シンポジウム, 朱鷺メッセ (新潟)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村満, 水野雅文, 野田隆政
2. 発表標題 ECTにおけるインフォームド・コンセント
3. 学会等名 第115回日本精神神経学会学術総会, シンポジウム, 朱鷺メッセ (新潟)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安藤久美子
2. 発表標題 ADHDと精神鑑定
3. 学会等名 第15回日本司法精神医学会大会, 花巻温泉ホテル千秋閣 (花巻)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中西裕之, 黒崎雅之, 大澤玲於奈, 桐野桜, 渡壁慶也, 王婉, 岡田真央, 清水孝夫, 樋口麻友, 高浦健太, 金子俊, 玉城信治, 野田隆政, 土谷薫, 板倉潤, 高橋有香, 泉並木
2. 発表標題 ミニマル肝性脳症におけるL-carnitine治療介入の臨床的意義 近赤外線光トポグラフィによる検討
3. 学会等名 第55回日本肝臓学会総会, 京王プラザホテル (新宿)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉卓洋, ニツ アンダ-マリア, 石原正規
2. 発表標題 動作分析のためのオープンソースKinoveaの利用について: ダートフィッシュ・ソフトウェアとの比較
3. 学会等名 電子情報通信学会ヒューマン情報処理 (HIP) 研究会, 沖縄産業支援センター (沖縄)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川島義高, 山田美佐, 古家宏樹, 國石洋, 野田隆政, 山田光彦
2. 発表標題 不安を主症状とする精神疾患に対するRiluzoleの効果についての検討：システマティックレビュー
3. 学会等名 第28回日本臨床精神神経薬理学会 第48回日本神経精神薬理学会, 東京 (東京ドームホテル B1F シンシアサウス+ハワイエ)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 服部功太郎, 野田隆政, 秀瀬真輔, 吉田寿美子, 功刀浩
2. 発表標題 臨床におけるECTの疑問 ECTの分子マーカーの探索
3. 学会等名 第114回日本精神神経学会学術総会, 神戸 (神戸国際会議場)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安藤久美子, 中澤佳奈子, 曾雌崇弘, 野田隆政, 岡田幸之
2. 発表標題 地域司法精神医療 その10年を振り返って
3. 学会等名 第114回日本精神神経学会学術総会, 神戸 (神戸国際会議場)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Koizumi, K., Ueda, K., & Nakao, M
2. 発表標題 Development of a cognitive brain-machine interface based on a visual imagery method
3. 学会等名 40th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society, U.S.A.(Hawaii Convention Center) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Koizumi, K., Ueda, K., & Nakao, M
2. 発表標題 Development of cognitive brain-machine interface based on visual imagery
3. 学会等名 7th International BCI meeting, U.S.A.(Asilomar Conference Center) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安藤久美子, 中澤佳奈子, 岡田幸之
2. 発表標題 医療観察法通院対象者の12年間の軌跡と社会内統合の実態
3. 学会等名 第14回日本司法精神医学会大会, 山口 (山口県総合会館)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安藤久美子, 中澤佳奈子, 照本麦子, 大塚俊弘
2. 発表標題 性犯罪者治療の現在 発達障害および知的障害者向けの治療プログラム(SPIRITS)の紹介
3. 学会等名 第114回日本精神神経学会学術総会, 神戸 (神戸国際会議場)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 神山昌也, 安藤久美子, 伊東孝滋, 神山明子
2. 発表標題 入院時アセスメントを活かした退院支援への取り組み
3. 学会等名 日本社会精神医学会 (東京)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安藤久美子、伊豆丸剛、小口芳世
2. 発表標題 性犯罪リスクのある知的障がい者向けの治療プログラム
3. 学会等名 日本社会精神医学会（東京）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秀瀬真輔, 太田深秀, 松尾淳子, 石田一希, 平石萌子, 吉田寿美子, 野田隆政, 佐藤典子, 寺石俊也, 服部功太郎, 功刀浩
2. 発表標題 大うつ病性障害患者における肥満の認知機能および脳構造との関連
3. 学会等名 第39回日本生物学的精神医学会第47回日本神経精神薬理学会合同年会, 札幌（札幌コンベンションセンター）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石井敬, 服部功太郎, 宮川友子, 篠山大明, 秀瀬真輔, 太田深秀, 横田悠季, 松村亮, 野田隆政, 吉田寿美子, 後藤雄一, 功刀浩
2. 発表標題 精神疾患の脳脊髄液における補体C5の亢進
3. 学会等名 第39回日本生物学的精神医学会第47回日本神経精神薬理学会合同年会, 札幌（札幌コンベンションセンター）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渡邊健太郎, 服部功太郎, 宮川友子, 秀瀬真輔, 石井敬, 横田悠季, 松村亮, 野田隆政, 吉田寿美子, 功刀浩
2. 発表標題 大うつ病性障害や双極性障害の一部症例で髄液中trypsinの上昇が認められた
3. 学会等名 第39回日本生物学的精神医学会第47回日本神経精神薬理学会合同年会, 札幌（札幌コンベンションセンター）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松田勇紀, 鬼頭伸輔, 戸口裕介, 関谷純平, 藤井猛, 池澤聰, 野田隆政, 中込和幸
2. 発表標題 難治性双極性うつ病への反復経頭蓋磁気刺激 (rTMS)
3. 学会等名 第113回日本精神神経学会学術総会, 愛知 (名古屋国際会議場)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 野田隆政
2. 発表標題 ECT における臨床現場で直面する問題と対処 ECT の効果を最大限に引き出すために 技法の観点から
3. 学会等名 第113回日本精神神経学会学術総会, 愛知 (名古屋国際会議場)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鮫島達夫, 野田隆政, 金野倫子, 奥村正紀, 竹田美香, 寺下稔, 一瀬邦弘, 大石光枝, 三野原義光
2. 発表標題 ECT における臨床現場で直面する問題と対処ECT の効果を最大限に引き出すために 麻酔管理から
3. 学会等名 第113回日本精神神経学会学術総会, 愛知 (名古屋国際会議場)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 曾雌崇弘, 野田隆政, 安藤久美子, 岡田幸之
2. 発表標題 反応抑制に関わる後期事象関連電位活動パターンを用いた気分障害特性に関する事例研究
3. 学会等名 第46回日本臨床神経生理学会学術大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小関俊祐, 池澤聡, 瀬戸山志緒里, 中澤佳奈子, 西優子, 野村茉未, 野田隆政
2. 発表標題 児童の抑うつと行動傾向の関連
3. 学会等名 行動療法学会第42回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Okada T.
2. 発表標題 Social Safety Nets -Crime Prevention, Correction and Victim Protection of Random Killing Spree Cases.
3. 学会等名 The 2016 Judicial Protection and Crime Prevention Forum: Strengthen Cooperation and Future Challenges. (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Okada T.
2. 発表標題 Indiscriminate Mass Murders in Japan.
3. 学会等名 17th Pacific Rim College of Psychiatrists (PRCP) Scientific Meeting (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 曾雌崇弘, 中島平三, 萩原裕子
2. 発表標題 認知的要求に応じて言語処理は適応的に変化する: 文法マーカ-の二面性
3. 学会等名 第39回日本神経科学大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 安藤久美子, 日本弁護士連合会・日弁連刑事弁護センター, 日本司法精神医学会・精神鑑定と裁判員制度に関する委員会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 現代人文社	5. 総ページ数 294(pp29-35)
3. 書名 ケース研究 責任能力が問題となった裁判員裁判 (統合失調症圏ケース1)	

1. 著者名 安藤久美子, 日本弁護士連合会・日弁連刑事弁護センター, 日本司法精神医学会・精神鑑定と裁判員制度に関する委員会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 現代人文社	5. 総ページ数 294(pp126-132)
3. 書名 ケース研究 責任能力が問題となった裁判員裁判 (気分障害圏ケース5)	

1. 著者名 五十嵐禎人、岡田幸之	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中山書店	5. 総ページ数 288
3. 書名 刑事精神鑑定ハンドブック	

1. 著者名 樋口輝彦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 医薬ジャーナル社	5. 総ページ数 160
3. 書名 診断のコツ 1 うつ病の診断方法. 「医師と患者・家族をつなぐうつ病のABC」	

1. 著者名 近藤直司、田中康雄、本田秀夫	4. 発行年 2017年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 334
3. 書名 こころの医学入門 - 医療・保健・福祉・心理専門職を目指す人のために -	

1. 著者名 内山 登紀夫	4. 発行年 2017年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 264
3. 書名 発達障害支援の実際 - 診療の基本から多様な困難事例への対応まで -	

1. 著者名 安藤久美子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 日本臨牀社	5. 総ページ数 627
3. 書名 新領域別症候群シリーズNo.37精神医学症候群（第2版） 「統合失調症と暴力犯罪」	

1. 著者名 安藤久美子	4. 発行年 2016年
2. 出版社 星和書店	5. 総ページ数 208
3. 書名 精神鑑定への誘い	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	上田 一貴 (Ueda Kazutaka) (10403594)	東京大学・大学院工学系研究科(工学部)・講師 (12601)	研究分担者期間は2018年度～2019年度の2年間。
研究分担者	岡田 幸之 (OKADA TAKAYUKI) (40282769)	東京医科歯科大学・大学院医歯学総合研究科・教授 (12602)	
研究分担者	安藤 久美子 (Ando Kumiko) (40510384)	聖マリアンナ医科大学・医学部・准教授 (32713)	
研究分担者	石原 正規 (Ishihara Masami) (60611522)	首都大学東京・人文科学研究科・准教授 (22604)	研究分担者期間は2019年度の1年間。
研究分担者	曾雌 崇弘 (soshi takahiro) (00381434)	大阪大学・生命機能研究科・招へい研究員 (14401)	研究分担者期間は2016年度～2017年度の2年間。